「救われた言葉」

日野中学校　二年　松本　きい

「社会を明るくする運動」というテーマにあてはまるのか分かりませんが、私の実体験で最近感じた事の中に人と人との繋がり、人の温かさ、健康のありがたみを最近すごく感じるようになったので作文にしたいと思いました。

私はバレーボール部に所属して中学一年生の秋、いつも通り練習に取り組んでいるときに急に膝が「ピキッ」となり歩くことも膝を曲げることもできなくなり、その瞬間色々な思いで頭がいっぱいになりました。なぜなら、小学五年生の時にもバレーボールの試合中に スパイクを打つため、ジャンプをした時の着地で膝を痛めて緊急手術をしたときと同じ痛みだったからです。それと、小学生の頃とは違ってその時はテスト期間中だったので授業に遅れる不安とケガとの不安で頭が真っ白になりました。一人で歩くこともできないので

まつもと

両親や病院の先生など色々な人に手伝ってもらって病院に行きました。小学生の時にした手術が終わって半年間頑張ってリハビリをしてから最近MRIを撮って先生にもきれいに膝が治っているよと言ってもらったばかりだったのに一年もたっていない状態で今、またMRIの中にいる怖さで不安が小学生の時よりも大きくなっていきました。MRIの診断は前と同じ半月板損傷ですと先生の口からその言葉が出てきた瞬間私は痛みよりもまた大好きなバレーボールができなくなること、何で自分が二回も大きなケガをしてしまうのか、その悔しさが大きく先生の話しの内容が入ってこなくなりました。二回目だからこその怖さがありけがをしないでバレーをしている人がうらやましく感じました。テスト期間というこどもあり、足の痛みと戦いながらも勉強もがんばっていましたが、病院に通うための遅刻をするため授業に追いつけない不安がとてもありました。どうしても手術のことが頭を

よぎるので学校にいる時も授業に集中できず
怖かったです。その時に自分を頑張ろうと思
わせてくれたのが友達の言葉、友達の温かさ
でした。自分が少し元気がなかった時に、
「あなたならいけるよ」「困ったことがあっ
たらすぐ言ってね」など前向きな声かけをた
くさんしてくれる友達がいて私は良い友達に
恵まれているなとすごく感じたし勇気が湧き
ました。そして、入院になり病室に着いた時、
小学生の時の手術後の足の痛みを思い出した
り色々な先生が手術のリスクの話や麻酔の話
などを聞いてより不安になりました。ですが、
担当してくれた看護師さんがとても優しくて
「大丈夫、大丈夫」と何度も声をかけ、安心
させてくれたので手術当日も大きなベッドに
乗り看護師さんが何人もベッドをおしてくれ
る中両親とも離れ不安で涙が出てきた時も看
護師さんが手を「ギュッ」とにぎってくれて
落ち着かせてもらえた時、周りの人の温かみ
をすごく感じ安心できたことは今でも忘れら

れません。手術は成功したけれど、歩けるようになるまでは時間がかかり、自分がベッドでじっとしている間も学校で皆がバレーの練習をして上手になっていったり、一生懸命勉強しているとと考えると胸が痛くなり、部活に行くこともバレーをすることと自体も少し怖くなってしまいました。無事退院しマイナスに考えていた自分を変えてくれたのが退院して部活に復帰した日の仲間の行動でした。松葉杖をついて何もできない自分にキャプテンが「早く復活してコートに立とう」と言ってくれた時、私はこんな何もできない自分でも仲間の一員や来てくれてうれしいと言ってもらえて今までの私は早く足のけがを治して一日でも早くボールを触りたいとしか願っていなかったけどケガをしたからこそ見える部分、感じる部分が分かり元気だったころには分からなかった思い健康へのありがたみあたり前のことがあたり前ではないことを味わった私だからこそできること、皆に伝えられること

があると仲間や両親、看護師さんの言葉一つ

一つが救いの言葉だったから今、またバレー

ボールに向き合えているのだと思います。

学校で行われた「社会を明るくする運動」

の取り組みについて先生から説明を受けた時

私はこの手術と孤独の体験を書こうと強く思

いました。最初犯罪や非行という言葉は毎日

バレーをしている私には遠い世界の出来事の

ように感じていましたが、自分の体験と似て

いることもあり、誰もが失敗したり上手にい

かないこと、挫折することもあるということ。

そして困っている人に可哀想だ、とか同情の

目や声をかける言葉ではなく私がたくさんの

人に言ってもらった「大丈夫」や「待ってる

よ」など前向きな言葉が色々な人を救うのだ

ということを自分自身の体験を通して感じた

ことです。

20 × 20